

シミリに込められた「異質性」

Disparateness Involved in Simile

広島国際大学健康科学部医療福祉学科 杉本 巧

SUGIMOTO Takumi

キーワード：シミリ、異質性、会話

1 目的

会話のなかで、会話相手がよく知らない物事を描写したり説明したりする際、それと類似した物事を引き合いに出すことがある。本稿では、説明や描写の対象となる物事を「ターゲット」、引き合いに出される物事を「ソース」と呼ぶことにする¹。

何らかの点で類似しているターゲットとソースは、本来属しているカテゴリーが近い（あるいは同じ）場合と、遠い場合とがある。例えば、「レッサーパンダはタヌキみたいだ」というとき、ターゲットの「レッサーパンダ」とソースの「タヌキ」は、両方獣^{けもの}という同じカテゴリーに属し、種としても近い。それと比べて、「あの社長はタヌキみたいだ」の場合、人である社長と、獣であるタヌキのカテゴリーは、相対的に離れている。本稿では、前者のような場合を「リテラルな（文字通りの）比較」と呼び、後者のような場合を「シミリ（直喩・明喩）」と呼ぶ。シミリは、「みたい」という「類似性標識」（鍋島 2020）が付加されている、メタファー（隠喩・暗喩）の一形式²である。本稿は、メタファーの一形式としてのシミリを関心の中心とする。

類似性標識を伴うシミリは、ターゲットとソースのカテゴリーが離れてはいても、類似した物事を引き合いに出す点では、リテラルな比較と同じようにも見える。では、実際の会話のなかで、シミリはどのように使われているのだろうか。この点について、実際の会話をデータとして、実証的に明らかにした研究は見当たらない。

そこで本稿では、シミリの会話における機能を、リテラルな比較との対比を通して検討する。それにより、シミリが、類似性に加え、話者がターゲットの「異質性」を見出したことを示す表現であることを示す。

2 先行研究の整理

まず、リテラルな比較とシミリの区別、範囲を示しておかなければならない。2.1では、メタファーの認定を巡る議論を紹介し、本稿の方針を述べる。2.2では、先行研究におけるリテラルな比較とシミリの違いに関する指摘を紹介する。

2. 1 メタファーの認定

シミリはメタファーの一形式であるので、その認定は、メタファーの認定に準じる。したがって、ここではメタファーの認定についての議論を参照する。

ある表現がメタファーであるかどうかを統一的な基準をもって判定しようという試みは、特に海外で見られる。代表的なのは、研究者グループ Praggeljaz による MIP (Metaphor Identification Procedure: メタファー認定手順) (Praggeljaz Group 2007) と、その修正・発展版である MIPVU (MIP Vrije Universiteit) (Steen et al. 2010) である³。両手順とも、対象となる表現について、その文脈での意味が、その語句の「より基本的で共時的な意味 (more basic contemporary meaning)」と、「相違 (contrast)」があり、なおかつ、それとの「比較 (comparison)」によって理解されていることをメタファー認定の条件としている。例として、あるテキストでの「struggle」の意味が分析されている (Praggeljaz 2007: pp. 5-6)。その基本的な意味は、「誰かに抗って身体的な力を使うこと」であり、そのテキストの文脈での意味は「人の否定的な見方や態度を変えるための努力や困難」である。これらの意味は相違しており、後者は前者の意味との比較によって理解されているため、メタファーと判定されている。

Cameron and Maslen (2010) も、ほぼ同様の手順を提案している。簡単にまとめると、当該語句について、その文脈中の意味と他のより基本的な意味との間に対照性や「不一致 (incongruity)」があり、なおかつその文脈中の意味が、基本的意味からの意味的な「移行 (transfer)」によって理解される場合、メタファーと判定するというものである。

しかし、鍋島・中野 (2016) で詳しく論じられているように、これらの方法では、相違や不一致が具体的にどのような特性なのか、「比較」や「移行」がどのようなプロセスなのかについて説明が十分でないため、結局、十分な客観性をもって判断する方法にはなっていない。

上の「相違」「不一致」という性質の具体的な内容を説明しうるメタファーの指標に、楠見 (1995) が指摘した「カテゴリー的距離」がある。楠見は、メタファーを構成するソースとターゲット間のカテゴリー的意味空間における距離 (簡単に言えば非類似度) を測定し、その「距離」が大きいほど、比喩 (本稿のメタファーおよびシミリ) の面白さが高まり、比喩の良さが増すことを明らかにした。また、楠見の主張を承けた鍋島 (2020) は、ターゲットとソースの「カテゴリー乖離」をメタファーに必須の性質としている。

本稿では、楠見の「カテゴリー的距離」ならびに鍋島の「カテゴリー乖離」を、メタファーおよびシミリの指標とする。ただし、どの程度の距離の大きさであればメタファーとなるかは、十分議論されておらず、結局のところ認定は、解釈する分析者の判断にある程度依存せざるを得ない。

このように現状では、リテラルな比較とシミリは連続的で、境界を明示することは困難である。だが、それほど判断が揺れない事例を取り上げて議論していくことで、両者の機能の違いを明らかにすることは可能と考える。

2. 2 リテラルな比較とシミリの違い

ここでは、リテラルな比較とシミリの機能的な違いに関する先行研究の指摘を紹介する。

佐藤 (1992) は、比較表現 (本稿の「リテラルな比較」) がすべて直喩 (同じく「シミリ」) ではな

いとする。そして直喩では、予想外の、意外な類似性が提案される一方、リテラルな比較では、「常識の目で見て、もともと類似性があってもおかしくない同類のものあいだに期待どおり類似性が見いだされる」（同上：pp. 97-98）とする。

野内（2002）は、上述の楠見らと同じく、カテゴリーの概念を導入し、直喩は、「単なる比較」（リテラルな比較）と対比して、「異質なカテゴリー同士のあいだに「類似性」（p. 69）があり、意味論的衝突（意外性）があると指摘する。

2. 1と、本節での先行研究の整理から、ひとまず、リテラルな比較とシミリの違いは、ターゲットとソースの間の「カテゴリー乖離」と、表現に伴って生じる「意外性」であるとまとめられる。言うまでもなく、カテゴリー乖離と意外性は表裏一体である。シミリのターゲットとソースの間に、カテゴリー乖離があるということは、通常結びつかない対象同士がカテゴリーを越えて結びついているということであり、当然そこには何らかの意外性が生じる。

ただし、その意外性は、あるシミリを解釈する際に、ターゲットとソースのカテゴリー乖離によって生じる性質である。それが会話における発話の機能にどのように関わっているかは、実際の会話を観察して確かめなければならない。続く3では、実際の会話に出現した事例を取りあげ、リテラルな比較とシミリの文脈及び使用目的の違いを観察し、分析を行う。

3 データの分析

ここでは、会話データにおけるリテラルな比較とシミリの事例を分析する。

本稿で分析の対象としたデータは、国立国語研究所作成の『日本語日常会話コーパス』（Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC）モニター公開版（合計50時間分の会話）に収録されている会話の映像・音声資料である。以下で示す事例には、同コーパスでのデータIDを付している。データの詳細や転記方法は、付録を参照されたい。分析対象となる事例は、筆者自身が手作業で抽出した。

以下では、会話でのリテラルな比較とシミリの使用目的として、3. 1で「ターゲットについての理解の促進」、3. 2で「ターゲットについての理解の確認」、3. 3で「ターゲットについての見解の提示」を挙げ、特にシミリが用いられている事例の特徴を示す。なお、各事例において、リテラルな比較、またはシミリに該当する部分には、波下線を付している。

3. 1 ターゲットについての理解の促進

話題となっている対象についての理解を促進するため、類似した他の対象を引き合いに出す事例が、リテラルな比較でもシミリでも見られる。リテラルな比較の事例（1）（2）と、シミリの事例（3）を示す。

（1）では、三種の競技をするトライアスロンで着用する「ウェア」（ターゲット）について、美沙が03行目で「水着みたいな」と表現している。ウェアを直接知らない会話相手の玲子が容易にイメージでき、なおかつ実際のウェアに類似している水着をソースとして引き合いに出していると考えられる。

(1) C001_002

(トライアスロンに臨む玲子がウェアについて説明)

- 01 美沙：なんだけど[;、あの、
02 玲子：うん。
03 美沙：水着みたいなの:[え:と着替えるためのウェアってゆか[着替えないでもいい?
04 玲子： [うん。 [う:ん, うんうん。
05 美沙：それで泳げて;、でそのままバイク乗れてってゆのがあって、

(2) では、萌が以前宿泊した民家のような宿の説明をしている場面である。佐久に食事場所について尋ねられた萌は、03 行目で「食堂みたいなの」と、その様態を形容している。直接経験していない佐久も、容易にイメージしやすい例として「食堂」を引き合いに出している。

(2) K001_003a

- 01 佐久：ご飯は?
02 萌：ご飯は:. あ、だからそこ:が広いのか. 食[堂みたいなのがあつて:.
03 佐久： [;>なんか<ほら(0.6)そこでみんなで食べる.

(3) は、島村の息子がアルバイトをしている学習塾が話題になっている場面である。島村は塾について「新しい感じ」と前置きし、その指導方法の特徴を、15 行目で「伴走⁴みたいの」と描写している。勉強の「指導方法」とマラソンなどの「伴走」は、カテゴリーが乖離しているので、シミリと認定できる。

(3) K004_008

- 03 島村：[なんか A って塾なんだけど;、なんかね, [すごいあたら-, 新[[しい感じなの。
04 はるな：[うん [ふ:ん。
05 すみれ： [あ:知らない。
06 島村：すごい授業を;、
07 はるな：うん。
08 島村：教えるんじゃなくつ[て;、
09 はるな： [うん
10 島村：子供とまあ一対一で,(0.3)
11 はるな：[うん
12 すみれ：[うん
13 島村：授業の計画とかを(0.5)[立ててあげて;、
14 はるな： [へ::
15 島村：そうゆうなんかね伴走みたいなのがあつて、

(1)～(3)の事例では、情報の受け手が直接経験していない物事(「トライアスロンのウェア」「宿の食事場所」「塾の指導方法」)がターゲットとなっている。話し手は、その説明のために、受け手も容易にイメージできると見込まれる対象をソース(「水着」「食堂」「伴走」)として描写している。

会話では、参与者相互によって事前(事後)の共有が予測・期待されている知識や情報からなる「共有基盤(common ground)」(Clark 1996)の構築や更新が常に図られている。共有基盤は、スムーズなコミュニケーションの成立を支える。(1)～(3)の事例でも、話題となっているターゲットについて、受け手が参照可能な対象をソースとして、共有基盤の構築を図っている。

シミリが用いられている(3)では、ターゲットである「学習塾の指導方法」が、「すごい新しい感じ」と前置きされている点が、文脈上(1)(2)と異なる。これは、島村が説明しようとしている塾(の指導法)が、他の参与者が思い描くような学習塾とは異なるということを予示している。したがって、島村の説明は、指導方法の内容だけでなく、その指導方法が一般的な指導方法と全く異なることも、焦点になる。カテゴリーが乖離している対象を引き合いに出すシミリによって、話題の指導方法と伴走が類似していることに加え、それが通常思い描かれる指導方法とは全く異なる性質を持っていることも示されているのではないだろうか。

3.2 ターゲットについての理解の確認

3.1の(1)～(3)の事例では、ターゲットについて直接経験のある話者が、その説明のためにリテラルな比較やシミリを発していた。それに対して、会話では、直接経験のない対象についての説明や描写を受け取った参与者が、その対象に関する自身の理解を確認するために発話することがしばしばある。その発話には、リテラルな比較やシミリが含まれることもある。ここでは、そのようなリテラルな比較の事例(4)と、シミリの事例(5)を示し、分析する。

(4)は、優子が自分で開こうとしている店の宣伝方法について、すでに店を持っている杉田に相談している場面である。03行目で、杉田は思い描いている宣伝媒体を「看板みたいな感じ」と描写する。優子は、07行目で「ポスターみたいなもの？」と発し、杉田の提案内容についての自身の理解を、「ポスター」を引き合いに出して確認している。杉田は08行目で、「うん、ポスターみたいなもの」とその理解が適切であることを示す反応をしている。

(4) K002_010

01 杉田：なんか夏にちょっとね なんか こう:(0.5)あそこ人がたくさん通るじゃない?

02 優子：[うんうんうん

03 杉田：[だから-(0.4)なんか 看板みたいな感じ-

04 グリーンスティックの宣伝とかそれはもうお金とか別のところで、

05 [(0.3)なんか貼ってみたら面白くないですか? イベントなんか。

06 優子：[うんうん

07 ポスターみたいなもの?

08 杉田：うん、ポスターみたいなもの。

(5) では、萌から「ニュージーランドの永住権を取得したら、二年間その居住地から離れられない」という説明を聞いた玲奈が、08 行目で「二年縛りみたいなの?...携帯の、まじ?」と反応している。この発話によって、玲奈は、永住権についての自身の理解を確認している。永住権に関する決まりと携帯電話の契約との間には、カテゴリー乖離があるため、シミリであるといえる。

(5) K001_003b

(萌の友人が取得したニュージーランドの永住権について)

- 01 萌：それから：永住権取りました[ってゆって、; [それから二年かな:]
02 玲奈： [うん []
03 佐久： [うん
04 萌：そ[こから離れちゃいけないのね。
05 佐久： [あ-あそうなんだ。
06 萌：で[それでやっと(0.7)[[えー(0.6)たぶんそうなんですよ:]
07 佐久： [あ-
08 玲奈： [[二年縛りみたいなの? なんかそれ、携帯の、まじ?]

(4) (5) とともに、話題となっている対象（ターゲット）について、ある点で類似する別の対象（「ポスター」「(携帯の) 二年縛り」）をソースとして、情報の受け手が理解の確認をしている。

それに加えて、(5) においては、玲奈の「まじ:？」という発話とその音調、文字化していないが、その際の驚きを表す表情や動作から、萌の説明内容が玲奈にとって大変意外で、違和を感じるものであったことが分かる。そのような点から、シミリを含む発話も、類似した対象の提示による理解の確認とともに、玲奈が感じた意外さや違和を示しているように思われる。

3. 3 ターゲットについての見解の提示

会話で話題となっている対象について、会話の参加者が自身の見解を提示（コメント）することがある。リテラルな比較の事例 (6) と、シミリの事例 (7) を示す。

(6) では、詩織が土産でもらったビーフジャーキーを食べ、その味がかなり「まずい」と述べた後、父の「そう?」という確認に対して、さらに具体的に「バーベキューで失敗したお肉みたい」とリテラルな比較によって描写している。

(6) K003_013a

- 01 詩織：まずい。
02 父：あそう?
03 詩織：えなんか、(1.4)なんか(0.3)バーベキューで失敗したお肉みたいな。

(7) では、学生である詩織が、実験に使う人形について、Wi-Fi の技術も使って「遠いところから...音声を出せる」仕掛けを作ったことを話す。それに対して、同じく学生の由佳が「科学者みたい」とコメントしている。由佳がカップ焼きそばを口に入れながら 06 行目の発話をしたためか、詩織が 07 行目で聞き返し、由佳は「すごい」を付加して、「科学者みたい」と繰り返している。これは詩織をターゲットとし、「科学者」をソースとするシミリであると考えられる⁵。

(7) K003_006

- 01 詩織：あの(0.4)この一番遠いところからでも：
 02 音声を出せるってゆう[ふうな:仕掛けを作ったので:。
 03 由佳： [ふ::ん。
 04 由佳：ふんふんふん。
 05 詩織：そしたらあの先[生-
 06 由佳： [科学者みたい]。
 07 詩織：ん？
 08 由佳：すごい科学者みたい。

(6) (7) とともに、ターゲットとなった対象（「ジャーキー」「詩織」）についてどう感じたか、話者の見解を提示している。シミリが使われている (7) では、08 行目で由佳は「すごい」と強調しており、驚きを感じている様子が見られる。また、ここまでのやりとりで、詩織には情報技術や実験器具に詳しい、専門家然とした様子はなく、由佳と同じく一般的な学生としての振舞いしか見られない。したがって、由佳にとっては、情報技術を駆使して実験器具を作ったという詩織の行動に、意外さや違和を感じたとしても不思議はない。由佳は、そのような印象も含めつつ、シミリによってコメントを提示したと思われる。

4 考察

以上、会話をデータとして、リテラルな比較と対比しながら、シミリが用いられる文脈について分析を行った。その結果、シミリが発される際には、話者がターゲットについて、他の同種の事例との差異や、意外さや違和を感じている様子が見られた。それらの話者が感じとった性質は、2. 2 で取り上げた先行研究において指摘されていたシミリの「意外性」とどのような関係にあるのだろうか。

2. 2 でも触れたように、先行研究が指摘していたのは、主に、シミリという表現によって異なるカテゴリーのターゲットとソースが結びつくことから生じる意外性である。それに対して本稿の分析では、ターゲットの有する特性について、話者がターゲットに差異や意外さ、違和を感じている様子が明らかになった。本稿では、そのような差異や意外さ、違和をまとめて、ターゲットの「異質性」と呼びたい。

この異質性は、(ターゲットとソース間の異質性ではなく) 話題として取り上げられているターゲットと、常識的で一般化された知識 (認知科学でいう「フレーム」や「スキーマ」(辻編 (2013) 等参照))

をもとに想定している同種の事例とを話者が比較したうえで見出される性質を指す。例えば、目の前にいる王子 A（偉ぶらず庶民的）と、常識的にイメージされる王子（偉そうで貴族的）との間に違和を感じるなら、王子 A には異質性があるといえる。つまり、ターゲットの事例が、同種の一般的事例にはない性質を有しているということである。

(3) (5) (7) の事例において、シミリの発話者は、ターゲットの学習塾や居住上の制約、学生（詩織）について、既存の常識的、一般的な知識を背景として、異質性を見出したと考えられる。そして、ターゲットと共通する特性を持ち、本来のカテゴリーが乖離するソースを引き合いに出すことで、その特性の説明や、理解の提示を行うのと同時に、同種の一般的事例とは異質であると認識したことも同時に表したのではないだろうか。つまりシミリは、ターゲットとソースの類似性に加え、話者がターゲットに異質性を見出したことも示す表現となっているのである。山梨（1988）も、この点をとらえて、直喩には「類似性をこえる意外性や驚きの認識がかかわっている」（p.31）とし、比喩の認知プロセスに類似だけでなく、差異の認識がかかわっていることを指摘している。

最後に、会話における機能の観点からの考察を加える。会話においては、話題として取りあげる事柄に、他の参与者にとって「普通」ではない、新奇な内容や情報が含まれていれば、話題としての価値が高まる。とすれば、ある話題の話し手が、話題の対象が一般的、常識的な同種の事例と異質であると示すことは、話題としての価値を高めることになる。また、受け手にとっても、話の内容自体の理解だけでなく、話題として取りあげられた事柄が一般的、常識的な同種の事例と異質であることへの理解も示すことは、その話題の価値を認めたこと、理解したことを示すことになる。したがって、シミリによる異質性の提示は、話題の価値を認める、あるいは高める方法の一つになっているのではないだろうか。

5 まとめ

以上の通り、本稿では実際の会話データの分析を通して、シミリが類似性に加え、話者がターゲットの異質性を見出し、理解したことも示す表現であるという点で、リテラルな比較と異なることを明らかにした。

本稿の分析は同時に、シミリの産出に、カテゴリーが離れた対象間の類似性の認識だけでなく、常識的な知識にもとづくターゲットの異質性の認識もかかわっていることを示唆する⁶。

シミリの形式は、本稿で取り上げた類似性標識を伴うものだけではなく、非常に多岐にわたる。今後は他の形式の会話での使用を観察すること、その前提として、メタファーおよびシミリを認定する方法を、より客観性の高いものにしていくことが必要である。

付録：本稿の転記資料で用いた記号

本稿のデータは、国立国語研究所作成『日本語日常会話コーパス』（Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC）モニター公開版に収録されている映像・音声データである。コーパスの詳細については、小磯・天谷・石本・居關・白田・柏野・川端・田中・伝・西川（2019a/b）および同コーパスの Web サイト（<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html>）を参照。本稿に掲載した転記資料

の大部分は、同コーパスに収録されている転記テキストデータに基づいているが、筆者が映像・音声データを視聴し、書き換えた箇所もある。また本稿の主旨に関係なく、内容の理解に影響しない範囲で省略している箇所もある。転記記号は、Jefferson (2004)をベースにした記号を用いている。以下に記号の説明を記す。

- [発話の重なる開始。複数行のこの記号がついている箇所から重なり開始。
- = 前後の発話に感知可能な切れ目がない。発話が切れ目なく複数行にまたがる場合にも使用。
- (数字) その秒数の無発声。本稿では小数点以下1桁に四捨五入。
- 文字: 直前の音声の引き伸ばし。 / 文字- 直前の語や発話の中断。
- . 下降調の抑揚。 / ? 上昇調の抑揚。
- , 発話が継続されるように聞こえる抑揚。
- h 呼気音、または笑い。 / .h 吸気音。
- 文字(h) 笑い混じりの発話。
- 文字 音声の強め。 / >文字< 相対的に速く発話。 / <文字> 相対的にゆっくり発話。
- (()) 転記者による注釈。

注：

- 1 認知メタファー理論 (Lakoff and Johnson 1980、1999、Lakoff 1993、鍋島 2011、2016) などで用いられる用語である。ただし、認知メタファー理論では、リテラルな比較はほとんど話題にならず、メタファーやシミリ以外に「ターゲット」「ソース」といった用語は通常使われていない。
- 2 本稿が依拠する立場である、認知メタファー理論では、メタファーは「異なる概念領域間の体系的な対応関係 (写像関係)」であると定義される。その概念的な対応関係としてのメタファーは、言語表現上、さまざまな形式で表れうる。鍋島 (2016) は、メタファーの存在を明示する形式を、「メタファー明示表現」と呼んでおり、「みたい (な)」もその一つである。
- 3 両方法の違いや妥当性の検討については、鍋島・中野 (2016) に詳しい。なお、シミリの判定については、MIPVUで扱われている。
- 4 「伴走」は、「伴奏」である可能性もあるが、発話時に島村が走っているかのように腕を振っているため、「伴走」と解釈した。
- 5 詩織も科学者も人間というカテゴリーの事例だが、人間の場合、職業などの社会的属性でもカテゴリーが細分化されており、学生である詩織と科学者との間には、カテゴリー乖離があるといえる。
- 6 もちろん、全てのメタファー、シミリがそうだと主張しているのではない。本稿では言及していないが、メタファーには形式や慣用性など、様々なバリエーションがある。

参考文献：

- Cameron, L. and R. Maslen. 2010. *Metaphor Analysis Research Practice in Applied Linguistics, Social Sciences and the Humanities*. Equinox Pub.
- Clark, Herbert H. 1996. *Using Language*. Cambridge University Press.
- Jefferson, G. 2004. Glossary of Transcript Symbols with an Introduction. In Gene H. Lerner. 2004. *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*. pp. 13-31.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019a) 『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 コーパスの設計と特徴』国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書3
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019b) 『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴』『言語処理学会第25回年次大会発表論文集』 pp.367—370.
- 楠見孝 (1995) 『比喩の処理過程と意味構造』風間書房
- Lakoff, G. 1993. Contemporary Theory of Metaphor. In A. Ortony (ed.) *Metaphor and Thought 2nd Edition*, pp. 202--251. New York: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- 鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』くろしお出版
- 鍋島弘治朗 (2016) 『メタファーと身体性』ひつじ書房
- 鍋島弘治朗 (2020) 「メタファーに「隠されたもの」といわれるシミリ」加藤重弘・滝浦真人編『日本語語用論フォーラム 3』 pp. 1-42. ひつじ書房
- 鍋島弘治朗・中野阿佐子 (2016) 「MIP: 理想のメタファー認定手順を求めて」英米文学英語学論集 5, 1-18.
- 鍋島弘治朗・中野阿佐子 (2017) 「シミリとメタファーの境界—シミリを導入する表現の分類に関する一考察」『KLS』 37: 121-132.
- 野内良三 (2002) 『レトリック入門: 修辞と論証』世界思想社
- Pragglejaz Group. 2007. “MIP: A Method for Identifying Metaphorically Used Words in Discourse.” *Metaphor and Symbol*, 22 (1): 1–39.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』(講談社学術文庫) 講談社
- Steen, Gerard J., Aletta G. Dorst, J. Berenike Herrmann, Anna A. Kaal, Tina Krennmayr, and Trijntje Pasma. 2010. *A Method for Linguistic Metaphor Identification: From MIP to MIPVU*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 辻幸夫編 (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』研究社
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』東京大学出版会